

夢をあきらめないで



本郷小学校5年 飯野 太良

バッファロー号に乗って田島さんがやって来る。田島さんが、ぼく達の学校に来てくると、わかった日から、早く会いたくてそわそわしていました。なぜなら「バッファロー号」という名前がとってもカッコよかったからです。初めて見たバッファロー号は、ふつうの人には見えない高さ七、八十センチメートルのすばらしい世界を味わわせてくれる、すごい乗り物でした。でも手も足も思うように動かせないのに、どうやって動かすのかなあと、思っていました。体育館に入って来た田島さんは、元氣よく笑顔でみんなに、「こんにちは。」とおっしゃいました。田島さんはとっても明るく、ニコニコしていました。そして、ぼく達の前で、バッファロー号を動かして見せてくれました。田島さんは、器用にアゴを使ってボタンをそうさしていました。前にも後ろにも思った以上のスピードで進むのでビックリしました。田島さんは、小さいころに大きな病気になるってしまった首から下が動かなくなってしまうそうです。田島さんのお話の中には、ぼく達に勇気を与える言葉がたくさんありました。「どんなに苦しくても死ぬのはにげだ。今が苦しなくてもがんばって生き

ていた方がよい。生きていれば楽しい事もある。」田島さんの言葉を聞いて、ぼくにも力がわいてきました。そして、田島さんが、なぜ生き生きしているのか、わかったような気がします。それは、田島さんが「バッファロー号」と、出会った事と関係していると思います。バッファロー号を使いこなすことで、世界が広がったとおっしゃっていました。外に出て、写真をとることが出来るようになり、夢を見つけたからだと思います。そしてぼく達に、「夢をあきらめないで」というメッセージをくださいました。夢にむかって進む強い心、自分を生んでくれたお父さん、お母さんに感謝する気持ちが田島さんの体全体から、伝わってきました。田島さんの周りには、「この花きれいでしょ。写真とつたらどう。」と話しかけてくれる人がいます。その花を見た田島さんは笑顔です。その様子を、ビデオで見せてもらったぼくも笑顔になります。田島さんの書いた詩の一つに「うそじゃないよ。」というのがあります。こんな詩です。おかあちゃん ぼくを生んでくれて ありがとう ぼくがたまに 不自由だったけど 幸せです うそじゃないよ おかあちゃん 本当に ぼくを生んでくれて ありがとう 田島さんの次の目標は、「海の中で写真をとること。」だそうです。ぼくは田島さんならきっと出来ると思いました。ぼくも、夢に向かって力強く生きていきたいです。

夢

なかるべからず

言葉と仕草の演出に賭ける



さん 京 楽 亭 遊 三

客席を明るくし

客席から零れ落ちる笑い、 噺家と客が共同で客席を作り上げる重要なフアクターだ。古典芸能の多くが客席を暗くする中、落語は敢えて客席を明るくし、観客を共演者に仕立

て上げている。その落語界で今、言葉と仕草で人の心を掻き立て、「共演者」の反応をみて瞬時に演出を変える、卓眼の若手真打がいる。 噺家 三遊亭京楽。 微笑みの中で客を見つめる彼の目は、真剣そのものだ。

譲葉の賦

⑧ 可堂誕生

一八三一年春、儀八が笈を背負い江戸に上り、東条一堂の門下となつてから八年の歳月が過ぎた。あの幼き日に仁山によって学問の端緒を導かれ、斎藤家の蔵書を肥やしとし、一堂によって最後の磨きをかけられた儀八は、堂々たる風格を備え、桃井可堂と名乗る当代随一の儒学者となつていった。 当時、可堂の名が江戸の町で広く知られていたことは、後にかの清河八郎や那珂梧楼とともに「一堂門下の三傑」に数えられたことから窺うことができる。 そんな或る日、可堂は師一堂に奥座敷に呼ばれた。「先ほど、杉浦出雲守様からお前を召抱えたいとの話があった。」左様でございますか、杉浦様と言えば、お屋敷内に小路の井があることで有名でございました。たしか相当深い井戸で底に水が流れ、物を落とすと出てこないとか。一度、目にしてみたいものです。「そうか、それでは杉浦様にお頼みしておくゆえ。明日にでも訪ねてみなさい。」杉浦出雲守は、九千石を食む幕臣で儒教を修め、博識を以

桃井可堂伝

て聞こえた人物であった。翌日、可堂は杉浦邸を訪ね、手入れの行届いた小路の井を物珍しそうに眺めただけで帰宅したが程なく、近習目付として出雲守の側近くに仕えるようになった。武家の暮らしは、田舎育ちの可堂に興味深いものであり、日々新しい発見があった。中でも、目に留まったのは家中の足軽身分以下の者達の暮らしであった。こうした者達は薄祿ゆえに妻を娶ると途端に生活が苦しくなる。そんな状況を見かねた可堂は出雲守に「家中の者が明るく働く家は、躍動感に溢れ、力強く発展するものです。然るに自家の薄祿では、妻子を持つことも適わぬ様子。妻を娶った者に対しては一人扶持を増し希望を持てるよう配慮すべきです。」と進言した。出雲守はこの進言を受け入れたうえ、家法とまでした。この一事からも出雲守の可堂に対する信任の厚さを窺い知る事ができるが、一方で新参者の可堂が行う改革は、古参の武士達の嫉妬を招く結果となった。 こうした事態を憂慮した可堂は、自ら同家を辞し、帷を垂れて緒生に教授する道を選ぶのである。

帷を垂れる…塾を開いて教えること

大道芸との出会い

野球少年だった。桜ヶ丘小学校、南中学校では泥と汗にまみれながら、話術で周囲を和ませた。一時体調を崩し野球と離れ、大学卒業後は熊谷の老舗デパートに就職した。人懐っこい笑顔と話術で子供服売



出身地である南地区の敬老会では、二席を演じきった

り場を任せられた。そこで、お客様との会話から「言葉」の楽しさを覚え、それを「芸」として昇華させたくなった。その後、アナウンス学校で基礎を学び、結婚式の司会などで糊口をしのいだ。そんな時、浅草にいた大道芸の笑芸作家の門を叩いた。大道芸のほか様々な影響を受けたその先生からは常々、芸能は古典に集約されて

続けてください

成9年、三遊亭楽太郎師匠に入門。芸風に加え理論だった考え方が尊敬でき、弟子入りした。そして今年、真を打った。二つ目から続けている三つの小さなホールの独演会はいつも盛況だ。最近は大きなホールからも声がかかる。しかし、「続けてください」という共演者であるお客様の言葉と、間近に見える笑顔が、今を支えるエネルギー源となっている。だから真打になった今でも、お客様の微妙な反応がわかる小さな独演会に拘り続ける。

夢七訓

夢なき者は理想なし 理想なき者は信念なし 信念なき者は計画なし 計画なき者は実行なし 実行なき者は成果なし 成果なき者は幸福なし ゆえに 幸福を求める者は 夢なかるべからず ※(本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています)